

いつの時代も恋と結婚は悩みの種。激しい恋は、時として親や社会を敵に回すこともある。それでも、人を思う気持ちは変わらない。1月、5月に続く連載では、恋と結婚をめぐる100年の人生案内の変遷をみていく。

恋と結婚

人生案内100年

大正時代の人生案内(当時のタイトルは「身の上相談」)は記者が回答しており、現実的な回答が多い。

1916年(大正5年)3月4日の相談は、好きな男性から愛を告白された18歳の女性から。「養父の遺言で、私と養父のおいとは結婚しなければならぬ。義理と恋との板ばさみで苦しんでいます」

回答は「あなた方の胸に往来している考えはまだ夢のようなものです。養父母の大きな恩の前に夢のような初恋は犠牲にしなければならぬまゝ」。

結婚は家と家との結びつきであり、当時の民法では親の同意が必要。家督相続人(長男や一人娘など家を継ぐ者)どうしの結婚は困難だった。

16年4月13日の相談は、かつて恋人がいたが二人とも家督相続人であったため、結婚をあきらめたという女性から。家族を安心させるために婚約者がいるが、「どう思い返しても結婚は嫌です」という相談に対し、回答は「女としての

賀川豊彦 家・法律に縛られず

よりで合し越一。神戸で組合生活協同組合を指導した。自伝的小説「死線」は大ベストセラー。ノーベル文学賞、平和賞の候補となった。

1931年(昭和6年)、回答者として賀川豊彦が登場し、人生案内(当時は「悩める女性へ」)に革命が起ころ。賀川は宗教家としての信念から、恋愛は神聖で、家族の犠牲にしてはならないと説いた。

を恐れて、あなたを愛していても法律上の手続きをとり得ないのでしよう。そういう場合には、法律上の手続きを無視して愛の手続きを送ってもいいじゃないですか(33年5月16日)。

力と義務を果たしていただき。どうせ、あなた一人がかぶりを振った(拒否した)とどうなるものでもないではありませんか」。

「22歳の処女。父が銭湯をはじめ、私が番台をあずかっているうちに三助(銭湯の下働き)と恋に落ちてしまいました。両親は二人をどうしても許してくれないのです」

戦前の結婚事情を研究している大塚明子・文教大学准教授は「当時、恋愛を理想とする考えは、都市の間層に広がっていた。しかし、情熱的恋愛をしている若者は、結婚相手を見極めることができなさとされ、見合い結婚が一般的。恋愛結婚を親が許してくれないなら、人生相談の回答は『許してくるまで待て』というのが普通だった。賀川の回答は過激で、戦後の考えに近い」と話す。

恋愛は危険なものに見られていた。23年7月28日の相談は、男から恋文が来るので困っているという女子校の4年生から。「異性も恋しく離れたくもないような気もいたします」という女性に対し、記者は「あなたはずでに墮落のふちに一步も二歩もはいつている」と警告する。

賀川の回答は「恋愛に生きようとすれば多少の犠牲も払いますが、それも覚悟されなければなりません。あなたが恋人を得るためにあるいは両親のもとを出なければならぬ場合もありましようがこれはやむを得ません(32年1月21日)。

賀川は「性生活にはいった動機が男の方に多少不純であってもあなたがそれを許すことができ、あなたの方にも愛が発生しているなら、あなたも大胆に今の家庭生活を続けてよいと思います。おそらくあなたの主人は日本の家族制度

を恐れ、あなたを愛していても法律上の手続きをとり得ないのでしよう。そういう場合には、法律上の手続きを無視して愛の手続きを送ってもいいじゃないですか(33年5月16日)。

読者のご相談あひ手に「悩める女性へ」欄 新設

賀川豊彦先生

日本女子大学教授

正田淑子先生

文化学院教授

河崎夏子先生



世は擧げて不潔のドン底に墜ちてある半端なエロソロの時代思想は、両性を破壊の一端へと押し流してゆきます。今やわが國の家族制度は古い殻から新しい殻への一大閉鎖に陥つてゐる。おどろきでは御婦人の煩悶が抑へられてゐることはありません。従つて毎日御相談の書簡が御婦人の机上に山積し、直接本誌へお見えになる方もあります。これらの御相談に接して本誌がいつもお答えすること。何とか御婦人の煩悶に代つて御婦人に御相談の手となりたいことですが、御婦人の煩悶に代つて御婦人の煩悶を代つたことを御婦人と共に喜びたいと思ひます。今後は御婦人だけでなく御婦人の御相談であらゆる煩悶を御婦人なく御相談下さい。その中から本誌は最も適切な問題に付きて、御婦人に本誌上でお答えして貰ふことに致しました。

大正時代の「身の上相談」のあと、昭和戦前には「悩める女性へ」が始まる。賀川豊彦の登場を告げる記事(1931年6月20日)

「愛を貫こう」戦前に回答

回 答 者